

# ハブ咬症者が過去最小の115名



沖縄県内にはハブ、ヒメハブ、サキシマハブの3種類生息し、県民や観光客の脅威となっています。ハブ咬症患者の数は1967年の557名を最高に除々に減少し、最近は140名台で横ばいでした(図1)。

しかし、1999年はその前年より30名も少ない、過去最少の115名になりました。内訳は最も大きくて攻撃的なハブによる咬症が81名と多く、サキシマハブ咬症27名、ヒメハブ咬症7名でした(図2)。ハブ咬症患者が少なくなってきた理由としては、

- ①開発によりハブの生息地が減少してきた。
- ②ハブは高額で売れるので捕獲される数が多い。
- ③ハブ咬症の危険性が最も高い農耕地、特にサトウキビ畑が少なくなってきた。
- ④ハブ研究室で開発したハブ捕獲器、ハブ防御ネット、ハブノック(殺蛇剤)等のハブ対策用器材の運用が定着してきた、などのことが考えられます。

今後も対策を強化する事により、沖縄県のハブ咬症患者数が2桁台になるのも間近でしょう。

## 7年ぶりに死亡事故が発生

40年程前までは咬症による死者が毎年数名いましたが、治療用血清の改良や治療技術の発達、交通体制の整備等により最近では数年に1人のレベルまで減少しています。最近6カ年間は死亡事故はありませんでしたが、昨年2月に北谷町で82歳の女性が夜8時頃、自宅の庭を歩行中にハブに気づかず足を咬まれ、救急車で病院に搬送されましたが多臓器不全症で3日後に亡くなりました。この女性の住宅のそばにはハブの絶好の住居である石垣があり、事故直後に北谷町役場の環境衛生課が設置したハブ捕獲器で、その後1年間で7匹のハブが捕獲されています。

## 市町村のハブ捕獲数が年間400匹に

沖縄県は市町村が行うハブ対策を支援するために、1992年から各市町村や個人に毎年500~1000台のハブ捕獲器を無償で貸与する事業を行っています(図3)。予算節減のため貸し出し数は年々少なくなっていますが、捕獲器で捕獲したハブが市町村から当研究室へ届られる数は年々増加し、最近は400匹ほどになっています。これは市町村の担当職員がハブ捕獲器の取り扱いに習熟してきたことによるものです。個人で捕獲したハブは、ほとんど届けられないので、捕獲実数はもっと高いと思われます。

## 観光客の咬症4名

ハブ咬症の40%は畑で農作業中に、30%は住居内と庭で、10%程度は山林や草地で起こります。咬症事故の大部分は日常生活の中で起こりますが、昨年は4名の観光客がハブに咬まれている

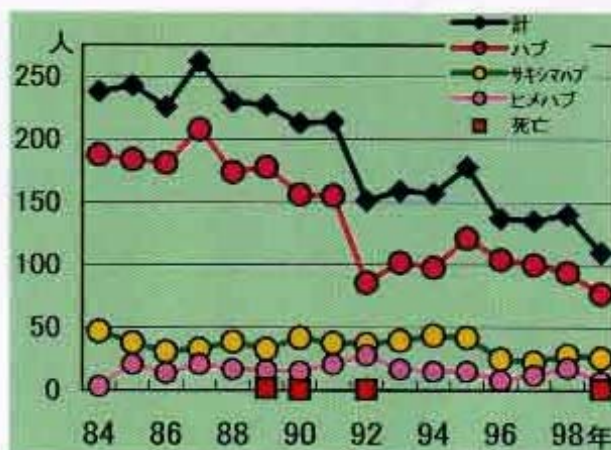


図1 沖縄県のハブ咬症の推移

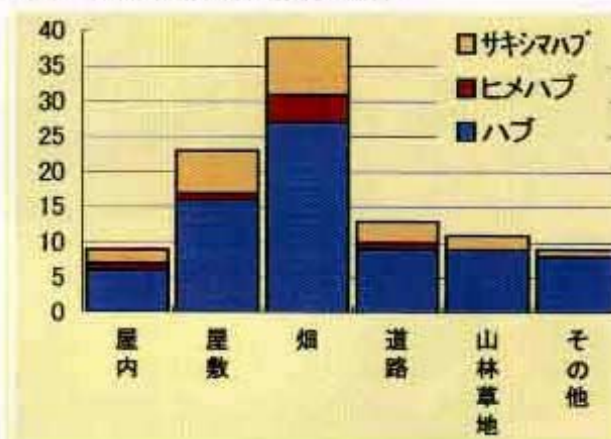


図2 1999年のハブ咬症の起きた場所

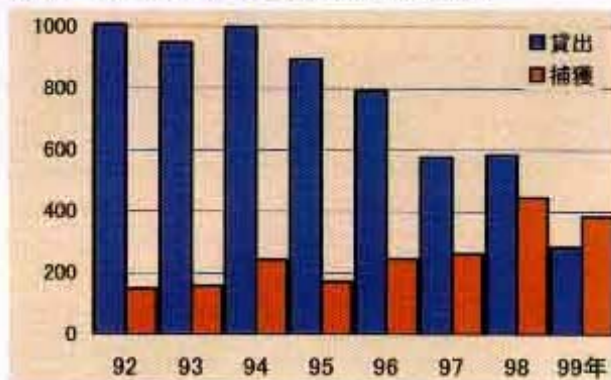


図3 貸与捕獲器と届け出ハブ数の推移

す。沖縄県の新たな観光資源として、その推進が検討されているエコツーリズムや保養・長期滞在型の観光はハブ対策を十分考慮しなければなりません。また、次年度から開始される小中高校の総合学習授業に、多くの学校で自然観察や野外授業が企画されており、ハブ対策がますます重要となります。

## サミット対策も進行中!

沖縄の自然環境には多くのハブが生息しています。沖縄サミット関連施設でもハブの出没が懸念されています。警備にあたる警察官のハブ対策指導はすでに当研究室で開始しており、会場周辺のハブ対策もハブが動き出す4月から行う予定です。(ハブ研究室)